

【表紙・裏表紙解説】 あいち国文第11号

表紙、裏表紙写真は『狂詩画譜』（愛知県立大学附属図書館蔵）。全一卷。小本。二七丁。刊本。四つ目綴。題簽は『銅脈先生狂詩画譜』、見返しに『新製五七言狂詩画譜』。天明六（一七八六）年刊。

畠中観斎（銅脈先生）の狂詩に、何人かが絵を付したものを京都の書肆・錢屋総四郎が編集した本。序の後に、目録としてそれぞれの詩題が提示されている。絵が丁の表に示され、一枚めくった裏にその画意に關わる狂詩が記されているため、本来は見開きで絵と狂詩を並べて見ることはできないが、今回の表紙、裏表紙では加工して並べた。

作者である銅脈先生（一七五二—一八〇一）は江戸時代中期—後期の讃岐（香川県）出身の狂詩作者。京都聖護院宮家の畠中正終の養子であり、聖護院宮に仕えた。本姓は都築。名は正盈。字は子允。通称は政五郎、頼母。別号に観斎、寛斎、片屈道人。儒者那波魯堂の門下だが、大田南畝（寢惚先生）と並び称され、東の寢惚、西の銅脈として狂詩の大家として知られた。この二人の狂詩の応酬を収め銅脈が編集した『二大家風雅』という作品も寛政二（一七九〇）年に刊行されている。銅脈の代表作である『太平楽府』は彼が十八歳の時に刊行され、

傑作といわれる「婢女行」「鴨東夜行」をはじめ五十二篇を収める。

狂詩は、漢詩を母体とした川柳・狂歌などと並ぶ滑稽詩のひとつであるが、文人意識が定着する宝暦の頃に漢詩文の制作がはやり、それとともにその素材として卑俗な風俗をとりあげる風潮が生じ、初期洒落本を中心とした漢文戯作が流行するといった日本文学史の潮流のなかで流行した。南畝の『寢惚先生文集』（明和四年）をはじめとした狂詩文集が相次いで出版され、近世文学に狂詩という一ジャンルを築く上で銅脈の狂詩はその一翼を担った。

参考文献・日野龍夫「江戸狂詩の世界」（東洋文庫五三八『太平楽府他』（平凡社 一九九二））、『国史大辞典』（吉川弘文館）、『日本国語大辞典』第二版（小学館）、『日本人名大辞典』（講談社）、愛知県立大学所蔵貴重書展『和本の世界』展示資料解説（二〇一〇）
愛知県立大学貴重書コレクション（<http://opac1.aichi-pu.ac.jp/kicho/index.html>）

（文責：熊澤美弓）